

新聞記者たちの見た三木露風―四国巡講の旅―

近 藤 健 史

はじめに

三木露風は、一九二〇（大正九）年から北海道のトラピスト修道院で文学概論などの講師として就任していた。修道院において一九二二（大正十一）年に受洗した以降は、カトリック詩人としての色彩を濃くする。また、露風の旅においても、これまでとは異なる様相を呈してくる。修道院滞在中の一九二三（大正十二）年四月に行われた樺太への講演旅行をはじめ、教会等に招聘される講演旅行が旅の形式となったのである。

露風は、一九二四（大正十三）年に修道院を辞して上京した後、教区長に依頼され講演旅行をしている。一九二六（大正十五）年五月から六月にかけての東北巡講の旅と、同年十一月の四国巡講の旅である。この二つの旅に関しては、露風が寄稿した『山崎新聞』に、紀行文「北日本の旅と自然と」（一九二八年・昭和三年二月十六日）（一九二九年・昭和四年三月二十一日、五十九回）、「四國の旅と自然と」（一九二七年・昭和二年七月一日）（一九二八年・昭和三年一月十六日、三十一回）として掲載されている。

この紀行文の存在は、一部の研究者により指摘されていた。しか

し、地方紙『山崎新聞』（兵庫県）が公的機関などに整った形で所蔵されていなかったこともあり、その実体は明らかではなかった。

この度、『山崎新聞』社主の親族と宍粟市役所に保存されていたものを合わせて、全発行号数の九割程を閲覧することができた。そこで「北日本の旅と自然と」と「四國の旅と自然と」の紀行文を比較してみた。一般的に著名な作家が、講演などで地方を訪れると新聞記者の取材を受けることから、特に新聞社や記者との関わりに注目してみた。すると、この二つの旅においても地方の記者たちの取材を受け、歓迎会などで親交を深めていた。ところが「四國の旅と自然と」は、訪問地の新聞記者との交流が詳細に記されている。また各地の新聞に掲載された露風自身に関する記事の転載が多数あり、露風の文学観が紹介されているという特徴があった。

本稿は、「四國の旅と自然と」において露風自身が紹介している新聞記者との交流と、四国四県の新聞における露風に関する記事を手掛かりに、地方紙記者たちの見た露風について考察したものである。旅の行程に関しては、カトリック雑誌の『小羊』に掲載された露風の「四國巡講記」（昭和三年五月）、雑誌『聲』に掲載された「三木露風氏四國教區講演行脚」（昭和二年一月）と「徳島に於ける三木露風氏の講演」（昭和二年三月）を参考にした。

露風は、一九二六（大正十五）年以降には中央詩壇を離れ、作品集を出版しなかったこともあり、この年をもって第一線を退いたと評されている。また、ひたすら神に向かつて高まる熱情をもっていた時期といわれている。そこで、大正十五年以降の新しい資料の発掘もあつて、紹介も兼ねつつ、記者たちとの交流を取りあげ、そこに見えてくる露風の姿や評価を明らかにすることも意義のあることと思われる。

一 旅の行程

一九二六（大正十五）年十一月の四国への旅に関して、露風によると「四国の教區長ホセ・アルバレス靈父から其國に於ける宣教を援助する為に、私は招聘を受けて十五日間各地を巡講した」とあり、教会側では「四国教區にては各教會に講演傳道をなすためカトリック詩人三木露風氏に懇請」したと記している。^(注2)

旅の行程は、『山崎新聞』掲載の紀行文「四國の旅と自然と」には日付の記載が少いことから明確ではない。そこで特に徳島市については「徳島に於ける三木露風氏の講演」によつた。^(注3) また、各地の新聞記事を参考した。その四国四県における露風の足取りを整理すると次のようになる。

（一九二六年・大正十五年・露風三十八歳）

十一月四日 午後五時半、東京を出発。

十一月五日 朝八時、神戸着。兵庫港から小松島着。徳島県徳

島市に到着。教區長に面会、聖堂で念願の三木ポー

ロ聖人像を見る。平龜樓旅館に宿泊。

十一月六日 鳴門を見学。午後七時より徳島公園内の「千秋閣」

で「文藝の鑑賞に就いて」と題して講演（カトリック教会青年会主催、徳島日日新聞社後援）。

十一月七日 午後二時より同市新町小学校にて「修道院に就いて」と題して講演。午後七時より「自由亭」で歓迎会（カトリック教会青年会主催）。

十一月八日 香川県高松市に到着。天主公教会でモデスト靈父に面会。辻梅旅館に宿泊。

十一月九日 屋島と栗林公園を見物。夜六時から香川県立公会堂で講演。

十一月十日 朝に高松市を出発し、愛媛県今治市に到着。天主公教会訪問。旅館錦水に宿泊。

十一月十一日 午後二時より精華高等女学校で講演。午後六時半より今治市公会堂で講演。

十一月十二日 愛媛県松山市に到着。末廣ホテルに宿泊。午後三時より美善女学校で講演。

十一月十三日 城山、道後等を見学。午後六時半より一般の人々のために県公会堂（元郡役所）で講演。

十一月十四日 祭壇祝別式の後に信者一同と記念撮影。愛媛県宇和島市に到着。蔦屋旅館に宿泊。

十一月十五日 昼食後、天主教会のイシドロアダネス靈父らと共に天救園、榊森神苑、和靈神社等を観覧、鶴島神社大祭と通水式祝の祭りを見学。第一小学校で開会の教育者関係の講演会を公開して、一般講演として午後三時より宇和島中学校で「宗教と文藝」

と題して講演（南豫時事新聞社主催）。午後七時より天主公教会内で歓迎会式座談会。

十一月十六日 午前六時五十分発宇鉄列車で吉野生を経て、自動車で高知県高知市に到着。天主公教会カルボー霊父と面会。土居旅館に宿泊。夕方「カフェー・ブラジル」で歓迎会（高知公教青年会主催）。

十一月十七日 夕方、高知市会議事堂で講演。

十一月十八日 公園、市内を見物。午後七時より市会議事堂で講演。

十一月十九日 午前七時出発、陸路帰途につく。香川県高松市から岡山県宇野港への連絡船に乗る。

二 新聞記者との交流

新聞社のメディア・イベントは、「自ら主催し、観客を動員し、取材し、そして批評する。関連記事はいくらでも量産することができ^(注4)」といわれている。

この四国巡講の旅においては、徳島市の教会が示した「教界の知らせ」の「徳島に於ける三木露風氏の講演」に次のよう^(注5)にあり、カトリック教会と新聞社が講演を主催するなど重要な役割を果たしていた。

「是より先三木氏四國に來らるとの報傳はるや熱心に待つ人が多かつた。各市の信者主催者側ではビラを作つたり、貼紙したりして出来るだけの準備をしたが、又徳島日々新聞、四國民報、東豫日報、伊豫新報、南豫時事新聞、高知新聞、土陽新聞及び大阪朝日新聞と大阪毎日新聞の四國版九新聞が、或は訪問して

三木氏の談話を掲げ、或は講演速記をか、げ、或は寫眞筆蹟等を載せたので、宣傳に都合がよかつたのであつた」

「又同氏の談話筆記が新聞に掲載されてカトリックを新聞で知つた者は數十萬人であつたであらう」

また、『山崎新聞』に記載されている新聞記者との交流を見ると宿泊先、名所見学、講演会などにおいて、ほとんど密着取材である。その交流状況を略記すると次のようである。

十一月五日 徳島市に到着して「平龜樓旅館」に宿泊。宿泊先

に『徳島日々新聞』の記者坂東秋岳君が来訪する。談話の間に、「畫の贊を頼まれて詩を揮毫した」

十一月六日 坂東君と自動車で阿波の鳴門を見学。『徳島日々新聞』に寄するため「徳島の印象」と題する文を

坂東記者に渡す。宿に帰り、『徳島日々新聞』の記者坂東君や矢田君たちの外三四人の来訪客と夕刻まで語つた。新聞で筆蹟を掲げる為に揮毫を求めたので、兵庫から阿波の小松島港へ来る航路で沼島を望み見て作つた歌を短冊に書いて渡した。夜の講演の後、『大阪朝日新聞』記者などと茶を飲んで話をする。その夜の講演について、翌日の『徳島日々新聞』に載る。（その記事は、『山崎新聞』『四國の旅と自然と（七）』昭和二年八月六日に引用）

十一月七日 『徳島日々新聞』の記者坂東秋岳君が来て、夕刊

に出てゐる私の短冊の筆蹟に就いて特別に三段抜きにしたことや夜の歓迎会のことを伝える。歓迎会では、詩歌の愛好者や『徳島日々新聞』記者の坂東君、阿波地方の民謡を謡う矢田君、地方歌壇で有力な荒尾君、菊池寛に似ている横山君が出席して談笑した。

十一月八日 朝、香川県に出発のため停車場に行くと秋岳君や

早見送りの人々が来た。

高松市に到着。夜になつて『四國民報』の記者が訪問して来て、新聞のため談話や色紙を出して筆蹟を求めた。翌日の高松市の新聞には、前夜の訪問記者の詩的な文体を持った文が載つた。(その記事は、『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(十一)昭和二年九月一日に引用)

十一月九日 屋島を見学の後、四國民報社の依頼で高松市の栗

林公園で写真を撮影する。

十一月十日 今治市の宿泊先に、『東豫日報』の記者が訪ねて

きて談話し、写真を撮る。

十一月十一日 『東豫日報』に前日の取材した記事と写真が掲載

される。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自

然と」(十四)昭和二年九月六日に引用)

十一月十二日 松山市の宿泊先に、伊豫新報社の阿部黎二君が来

訪して詩のことについて尋ねた。其の記事は、翌日の新聞に掲げられた。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(十五)昭和二年九月二十一日に引用)

十一月十四日 自動車で宇和島に向かう。『伊豫新報』は、松山

市に滞在中のことを記事にする。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(十九)昭和二年十月十六日に引用) 宇和島市に着いて、『南豫時事新聞』の大塚蒼児を紹介される。宿では、同新聞社の主幹井上雄馬君と語り合う。

十一月十五日 昼食後、南豫時事新聞社大塚記者の案内で伊達家

の天赦園や祭りを見学。当日開催された講演の状況と井上雄馬君の開会の辞が、後日『南豫時事新聞』に掲載。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(二十)昭和二年十月二十日に引用)

『山崎新聞』に「尚、同新聞は私の講演筆記を三日間掲載してゐたが茲には省く」とある。講演後、新聞記者や土地の有志たちと八ッ鹿の舞を観る。

二回目の講演(南豫時事新聞社主催)を終え、宿で『南豫時事新聞』の主筆西山鐵三郎君と主幹

社の記者が来て、社の書帳に揮毫を求められ、筆山を詠じた新作の民謡を書いた。

十一月十八日・十九日は、新聞記者と交流の記述はない。十九日、帰途に就く。

三 『山崎新聞』に掲載された露風に関する新聞記事

『山崎新聞』の「四國の旅と自然」には、四國の各新聞に掲載された露風に関する記事が露風自身により紹介されている。そこに描かれているのは、地方記者の見た詩人三木露風である。主として詩人としての露風と露風が語る文芸観についてである。次は、その記事の一部である。

(1) 十一月七日『徳島日々新聞』、徳島市滞在

「私のその夜の講演について、翌日の徳島日々新聞は、私の寫真と會場の寫眞を掲げ『美しい言葉で高貴な文藝の鑑賞を強調』と題して左の記事を載せた。」

「露風氏は『文藝の鑑賞に就いて』と題し思考的な美しい言葉で頗る克明に高貴な文藝の鑑賞を強調し幽遠なる人生を説いて聴衆を魅了した」

(「四國の旅と自然と」(七)『山崎新聞』昭和二年八月六日)

(2) 十一月九日『四國民報』、高松市滞在

「夜になって四國民報の記者が私を訪問して來た。慇懃に記者は私に新聞の爲談話を求め、又、色紙を出して執蹟を求め

の井上雄馬君と語り合う。西山君は、露風と龍野中学で同窓だった宇和島商業学校の橋本教頭の談話が、新聞に載っていることを伝える。また、宇和島市滞在中の事が、掲載されている。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(二十一)昭和二年十月二十六日に引用)

十一月十六日
高知市に向かう汽車の中で「民謡宇和島の唄」を推敲して『南豫時事新聞』に送る約束を思い出す。高知市に着き、夜七時からの歓迎会には、『高知新聞』と『土陽新聞』の記者も参加していた。

十一月十七日
朝、『高知新聞』と『土陽新聞』が、部屋に届けられた。新聞社より『宇和島時事新聞』の主筆から電話がかかってきたことを伝えられた。『土陽新聞』の朝刊に、高知市でのことが掲載された。(その記事は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(二十五)昭和二年十一月二十一日に引用)

また、両新聞に講演会を両新聞社が後援する広告が出ていた。市の名勝を見物のあと、『宇和島時事新聞』の主筆西山君に「民謡 宇和島の唄」を送る。(この唄は『山崎新聞』「四國の旅と自然と」(二十六)昭和二年十一月二十六日に掲載)

雨中に市街を見物、土陽新聞社の門側に当夜の講演会の大ビラが出ていた。宿に帰ると土陽新聞

たのである。私は、彼の希望に應じたが翌日の高松市の新聞は、詩的な文体を持ったその夜の訪問者の文を載せてゐた」

「暮れ悩む度ましい秋の季節の幕が静ひつな讃岐路の桐一葉に無窮の名残りをとどめてゐる夜空を罩めたる蕭策の蔭、今宵ばかりは冴へ返る星座の輝き、うるはしく晴々として恰も嚴かな饗宴が天上に開かれてゐるかのやうに思はれた。昨八日の夜記者は古新町通りの辻梅旅館の一室に今を時めく詩人三木露風氏のおだやかな優しい姿に面接したのである。露風氏は我日本詩壇に高く輝く貴い力の星である。彼が久しい詩的生活は滾々として盡きぬ清れつなる泉のやうな詩囊を肥やし自然の恩寵なる聖愛は彼の人自身の尊嚴な威容を形作けたものである。ちつと思索の黙相をつづけてゐられる氏の心の窓が展け放たれるのを待った、ただそれは青い花を憶れて彷徨ふやうな心で、―氏は案外力のこもつた聲で口を開いた『ただ自然の事象と外界の諸相を鑑賞し、そこに窮まつた世界を彷徨ふ事では満足することが出来ない。もつと本質的に内部生命を觀照し、表現して、心の世界を歌つたものではなくてはホントの力強い詩は生まれて來ない。私は、眞善美の融合した嚴かな境地に憩ふことの無上勸氣に浸つてゐる』」

（四國の旅と自然と（十一）『山崎新聞』昭和二年九月一日）

（3）十一月十一日『東豫日報』、今治市滞在

「其日の東豫日報は、私の寫眞と共に『文學の中で詩が最高級もつと讀まれたい。美しい四國の風光を禮讀しながら語る

露風氏』と長い題を以て左の記事を載せた」

「雨はれて十一日の静かな朝巡回講演の爲今治へ來た三木露風氏を、一番丁の錦水に訪ふ。氏は兵庫懸播磨の人、早稻田大學を出て早稻田新詩社及び研究會を同大學に造り、新しい体の詩を鼓吹した。詩の道を歩いて美的生活をしてゐられるのである詩集其他の著書は枚舉に暇がない、詩壇の重鎮である露風氏は宿舎の二階を開け放した居間で靜かに語りだす。

（中略）日本に於ける詩界について左の如く語つた」

（四國の旅と自然と（十四）『山崎新聞』昭和二年九月十六日）

「今、日本の詩は本質的傾向に向かひつゝある。民衆派を中心とした詩話會は解散し詩話會の出している雑誌『日本詩人』は廃刊した。新潮社が出している年刊『日本詩集』は中止するに至つた。それで今後は、詩の正しき道が盛んになるだろうと思ひます。で、『日本詩人』が廃刊しても他に各派の可なり有力な雑誌があるから詩壇が衰へるやうなことはない。』詩には道があります。詩は精神的傾向を帯びて行かねばならぬ。それが正しい道です。最後に私の希望するところは―本懸に於いて高尚なる新しい詩の趣味が發達して、そして精神的文明が生まれること―である。」

（四國の旅と自然と（十五）『山崎新聞』昭和二年九月二十一日）

（4）十一月十三日『伊豫新報』、松山市滞在

「ホテルに落ち着いた後、伊豫新報社の阿部黎二君が来訪して詩の事を尋ねたので、大体左のやうに話した―その記事は翌日の新聞に掲げられた。」

「四國でも詩が盛んになる事を望む、それに就いては詩の鑑賞の目を高めねばならぬ。詩の道を歩くのに正しい研究をする必要がある。自由詩と、定まつた音律を持つ詩とを問はず、何處までもリズムを重んぜられたい。自由詩にも内面的リズムがあるから却つて好い。散文を横に切つて書いたやうな詩はよくない。感情のリズムがあらば普通の散文と違つたものとしてのリズムがある筈だ。詩を作るには先ずリズムを重んずる觀念があつて欲しい。象徴詩を研究されたい。何故ならば象徴詩は詩の中でも最も本質的なものだから―」

〔四國の旅と自然と（十五）〕『山崎新聞』昭和二年九月二十一日

（5）十一月十四日『伊豫新報』松山市から宇和島市

「翌日、私は多くの人々の見送りを受けて自動車に乗り、宇和島に向かった。伊豫新報は左の記事を掲げた。『愛着と詩一片を松山に残して詩人南豫に去る』と題して―」

〔四國の旅と自然と（十八）〕『山崎新聞』昭和二年十月十一日

「滞在中の三木露風氏は十三日は市内及郊外を訪ね、子規堂及び城山、道後等に至り伊豫路に杖曳いて詩情豊かな自然美に暫し禮讃の辭を惜しまなかつたが同氏は愈印象深い松山を後

に宇和島で開催される同氏の講演會に臨むべく十四日午後一時自動車を驅つて宇和島に向かつたが同氏は出發するに際し／實に松山の山川美は私の心に深く刻込まれた、あの四國山脈の遠望は全く中央アジアのユイヤ山脈に似通つてゐる／と盛んに松山を禮讃した。遠く四國路の田舎に埋もれた讀み人知らずの歌を愛し、隠れた田園詩人の伸び行く姿に慈父の如き愛情を投げかけてゐる」

〔四國の旅と自然と（十九）〕『山崎新聞』昭和二年十月十六日

（6）十一月十四日『南豫時事新聞』、宇和島市滞在

「『あなたの事を橋本さんが談話した話が今日の新聞に出てゐますよ』と云つて示したのを見ると左の記事が出ていた」（橋本宇和島商業学校教頭）

「三木露風氏とは龍野中學で同窓でした。名門に生まれた人で學校へは一番で入學したほどの成績がよく、殊に文學と云へば、東京の雑誌に評論や詩歌を出してゐたり、姫路新聞や鷺城新聞の第一面の上の方に文を發表する事度々で、何とかいふ詩集を中學時代に出版したほどの天才でした」

「それから又斯ういふ記事が出てゐた」

「來宇中の三木露風氏は既報の如く十五日午後二時から本社大塚記者等の案内で、伊達家天赦園に至り例の先代萩御殿場の童謡にちなめるチシヤの木をいたく珍重し、暫く園内を逍

遙し、又愛宕山から市中を瞰下してその壯大な景色にうたれ、絶景だと叫んでしばらく去りも得なかつた。宇中の講演を終つて特に堀端通の好意による八ッ鹿踊りを杉山書店前で見たが思つたより非常によい踊りだと賞讃した。この踊に關しては堀端通で特に三木氏の爲遅くまで用意をして便宜を圖つた事に對しても呉々感謝してゐた。氏は宇和島の印象を民謡『宇和島の唄』として永久に來遊記念として市民に贈りたいと目下執筆中で數日中に本紙に發表されるが、本社では氏の意志を体し之を作曲せしめて宇和島の誇りとして永く傳へるべく計劃中である」

〔四國の旅と自然と（二十一）〕『山崎新聞』昭和二年十月二十六日

（7）十一月十六日『南豫時事新聞』、宇和島市滞在

「その時の狀況と井上雄馬君の開會の辭とは『南豫時事新聞』の記事を左に録しておく事にする。『繪の國を讚美する三木露風氏講演會』と題して」（宇和島中学校で講演）

「豫定の如く本社主催の詩人三木露風氏の講演會が十四日午後三時から宇和島中學校に於いて開催された。聴講者は教育家其他最も人格的な教養のある人々のみで、其數二百餘名に達し、婦人が三分の一を占めてゐた。先づ本社主催井上雄馬氏登壇、主催者として一場の開會の辭を述べたが、要は人生と文藝との關係より出發して現代文藝傾向を短評し、詩人三木露風氏を紹介したものであつて、その紹介辭の要領は左の

如くであつた。

「三木氏と私は同窓の關係であるけれども御目にかゝつたのは今日が初めてである。併し詩壇に於けるその高名は二十數年前の雑誌『文庫』時代から夙に親んでゐたところで、窃に氏の詩を通じて見たる風格に欽慕の情を禁じ得なかつた。今日はずも氏の風采に親しく接するの機會を得た事を喜ぶと同時にその講演を諸君と共に己れの郷土において聴く事の出來た事を非常に嬉しく思ふのである。私は常に自分自身の不健康を思ひ煩ふ事ほど他の健康体を羨望するのであるが、特に作家、詩人の健康体は尠くとも私の文學生時代には甚だ稀なものであつた。然るに今三木氏の偉大強健なる体驅と健康的、樂天的とも云ふべき活、した詩とを對比して見て、平凡な格言であるけれども健康なる精神は健康なる身体に宿る所以を如實に感得して、時弊の匡救に最も必要なる健全文藝の發達を希望する意味で此の講演會の益々有意義ならんことを喜び且祈るものである。三木氏は本年既に東北四懸の講演を終り、今や又四國四懸の講演をあと高知懸一つで終られんとしてゐる。斯くも多忙な旅行を續けつゝある氏が驚くべし今年中に既に八種の書物を出版してゐられる。氏の詩作執筆のエナジーが如何に豊富であり、その天才の傑出してゐるかを立證する一事例として御紹介の辭に代ふるものである。」

「尚、同新聞は私の講演筆記を三日間掲載してゐたが茲には省く」

〔四國の旅と自然と（二十）〕『山崎新聞』昭和二年十月

二十一日)

(8) 十一月十七日『土陽新聞』、高知市滞在

「土陽新聞の朝刊を見ると左の記事が出てゐる」

「日本詩壇の第一人者三木露風氏は高知青年會の招聘により文藝の講演をなす為昨日午後五時宇和島より陸路來高、中島町土居旅館に落ち着いた。今明兩日午後七時より市役所樓上にて『文藝の鑑賞』なる題下に講演をなす筈であるが昨夜着高するや七時よりカフェ・ブラジルにて青年會及び關係者其他は三木氏を招待して歡迎會を開き席上三木氏の感想談あり非常に靜肅且盛大な會であつた。尚、氏は往訪の記者に對して左の如く語つた」

「豫て訪ねたいと思つてゐた土佐に來て非常に愉快です。田畑の收穫が豊だと聞くが地上の樂園に生きるのは無上の喜悅ですね。汽車が不便なので、もつと交通を便にするのが目下の急務でせう。／詩話會の事ですが、私は同人ではありませんでした。あれには象徵派の詩人は一人も加はつてゐないので、事實上、詩壇のメンカアレントをなすものではない。詩話會が解散したといふのは當然ですね。あれは從來種々の内訌があり又新しい詩人から盛んに攻撃せられたものですから、あゝ云ふ様になつたのです。／詩は、ロマンチズムや高踏派や近代主義を含んで象徵派が日本に於いて主潮をなして來たので今後共然うであらうと思ひます。永遠なる精神と新

しき表現とを含んだのが我々の象徵派の特徴です。／私は昨年十種ほどの單行本を出しましたが講演に招かれたので自然を觀かたゞ／四國に來た次第です。何分この初めて來た土佐の氣分に浸つてゆつくり南國の秋を味ひ、大歩危小歩危の秋色を探つて陸路十九日香川へ向ふ考です、云々」

「四國の旅と自然と(二十五)」『山崎新聞』昭和二年十一月二十一日)

四 『山崎新聞』に引用された以外の、四國の新聞に掲載された三木露風氏についての記事(行程順)

露風の旅は、訪問先の新聞に掲載されている。それは、主に旅の行程や講演の日時、宗教詩人露風の紹介である。

(1) 『大阪朝日四國版』一九二六(大正十五)年十一月九日

「三木露風氏」

「詩人三木露風氏は四國行脚のため徳島に來り滞在中、六日鳴門觀潮をなしたが『鳴門の風光は背景雄大、かつ大形の総合的美を整へ瀬戸内海の美より更に美しい、この間十和田湖にも遊んだが鳴門には及ばない』と稱讃してゐた、六七兩日ローマンカトリック教會主催の文藝講演會に臨み『文藝の鑑賞、修道院について』と題し熱辯を奮ひ、また雅號の羅風といふも露風といふも二者それ／著書をあらわしてゐるからすきな方をよんで呉れとあつさり片付け、八日朝高松に向け出發した(寫眞は演壇の露風氏)」

(2) 『香川新報』十一月十六日～二十一日、六回連載

「文藝の鑑賞に就いて／修道院生活／十一月九日香川縣公會堂に於て／詩人三木羅風氏述」(一)～(六)(内容省略)

(3) 『香川新報』十一月二十二日

「詩人三木羅風氏の論述ついで／笠井露香」

「…ま、よ世は夏の一夜のかりの庵を過ごして秋も來初冬の讃岐路に三木羅風氏を迎へた事は何といふ喜びであろう。／現代中央詩壇の重鎮として且つ熱烈なる信仰の人として氏は可成りに私の心を衝動した、十一月の九日佛生山を離れて此の詩聖の爲に奉仕せんと急ぎ高松に走り來た私であつた氏の崇高な姿を拜見すると同時に氏がいつか書かれた大きさと深さと美と言ふ文章を憶ひ出し、そして又行住録を憶ひ出さしめた。(中略) 此の大詩人を迎へた高松文化はそして高松文藝は・・・それを思ふ時知らず私は涙が溢れるれた。祈らずには居られない、眠つてゐられるのでせうか高松の人々は・・・。(中略) 初冬の讃岐路に旅して來た大詩人の論を諸君の前に掲載する事もあながち私達同人の無駄奉仕でもないと信じます。現代社會の醜惡なるに反して此の論の内の修道院を讀み給へ／みなさんの生きる世の中にかく熱烈に道の爲に將眞の爲に神に精進してゐる私達同胞を一人でも多く知つて下さいませ」

(4) 『愛媛新報』十一月十日

「三木羅風氏／今治で講演」

「十一日午後二時現詩壇の大家三木羅風氏は(省略)」

『愛媛新報』十一月十一日

「詩人の講演／三木露風氏來松」

「中央詩壇に於て令名噴々たる詩人三木露風氏は目下四國巡遊中であるが(省略)」

『愛媛新報』十一月十六日

「三木羅風氏／宇和島へ」

「(略) 文藝講演を試みた聴衆二百名、その三分の一は夫人が占め非常な盛會であつた」

(5) 『海南新聞』十一月七日(夕刊)

「詩壇の大家／三木氏講演會」

「北海道のトラピスト修道院に立籠つてゐた詩壇の大家三木羅風氏Ⅱいまカトリック講演のため四國路を巡回中であるが(省略)」

『海南新聞』十一月十三日

「三木氏講演會／未曾有の／盛會を極む」

「今治天主教會主催にかゝる現詩壇の大家三木羅風氏の講演會は(中略) 次いで三木羅風氏は瀟洒な和服で満堂の拍手に迎へられ『修道院に就いて』と題し氏が五ヶ年間修道せる北海道トラピストの修道院の模様を約一時間半にわたつて人々に宗教のおごそかな殿堂を香氣高きことばによつて語り聴衆を傾聴せしめた、當日は青年處女が大半をしめ約三百名の聴衆があり意義深き講演會であつた」

『海南新聞』十一月十三日

「三木詩人來松／末廣へ投宿」

「國文藝旅行中の詩人三木羅風氏は松榎町末廣ホテルに投宿した」

『海南新聞』十一月十九日・二十日・二十二日、三回連載

「講演／文藝の鑑賞について／三木羅風氏」(一)・(二)・(三)、(内容は省略)。

(6) 『南豫時事新聞』十一月十日

「トラピストの神秘を説く／三木羅風氏／近く來宇／詩話と思想問題に就て／主催で講演會を開く」

「我國詩壇の權威として北原白秋よりも先輩であり象徴詩人としては實に我が詩界にエポックメイキングした人で總ての藝術が宗教に遡る如く其象徴主義の神秘から宗教に入りさきに北海道トラピストの修道院に在つて親しく詩と畫によつて懂れのトラピスト生活の神秘と壯嚴に觸れた三木羅風が今回四國天主教會聯合の招聘で四國を巡遊する事となり宇和島でも來る十四日午後二時松山より陸路來宇する事になった氏は『白き手の獵人』其他多くの詩集と思想問題、政治問題等の著書があり又講演も巧でさきに東京放送局からトラピスト修道生活に關するラヂオ講演をやつて十萬のラヂオファンを謹聽せしめた本社では今回の來宇を機とし氏に請ふて(中略)若い女性が懂れの神秘境トラピスト生活、詩話及び氏の新たな愛國主義の思想講演を公開する事となつた」

『南豫時事新聞』十一月十日・十一日(広告)、二回掲載

「十一月十四日午後七時／講師三木羅風氏」、「トラピストの修道生活／外詩話、宗教、教育、思想問題講演」

「本社では神秘詩人三木羅風氏を迎へて氏の蘊蓄を傾けた文藝談と世界にも數く日本にたつた一つの沈黙の宗教團トラピスト謎の宗教生活彼等の祈禱と勞働の生活無言の忍苦寥寂の北海道廣茫たる牧場の中に聳へ立つトラピスト修道院の祈禱と勞働の神秘な生活は詩と繪に描かれて吾れ等の耳目に觸れますが其の神秘的な宗教と彼等修道僧の忍苦の修行については餘り知られて居ません。／トラピスト修道院は世界に數多くなく日本にたつた一つ丈であります此珍しい宗教と其修業僧の實際についてはいやくも教育家宗教家思想を談する人々が等閑に出來ぬ問題であります三木羅風氏は神秘主義の詩人であり敬虔な宗教人であり熱情的愛國主義者です。現下の我國の思想は極端に混亂に陥つてゐる秋此神人の獅子吼は將に空谷のけう音ではないでせうか」(十日)

「本社では神秘詩人三木羅風氏を迎へて氏の蘊蓄を傾けた文藝談と世界の謎のトラピスト宗教生活を體驗し其奧義と髓に觸れた氏の詩教一致の境界から現代の思想教育を論じて戴き我等の精神の沃野を培いたいと思います(北海道の…)」(十一日)

『南豫時事新聞』十一月十四日

「詩人三木羅風氏講演會公開／十五日午後三時宇中校講堂にて／一般的に來聽歡迎／主催南豫時事新聞社(広告)」
「冬近き南國へ／詩壇の名星來る／四國行脚の三木羅風」

氏／十四日午後宇和島入り」

「歓迎茶話會」

「中學時代から／詩の天才／橋本商教頭談」

「小学校時代から文才を謳はれ當時中學世界に投書して常に賞品を貰つて居た事を記憶する龍野中學は半途で有名な岡山縣の閑谷中學に轉じて同中學に在學中今名称を思ひ出せぬが處女詩集を出版した程の天才である」

『南豫時事新聞』十一月十六日（「四國の旅と自然と」(二十)）で未紹介の部分を記す）

「本社主催／晩秋の繪の國を讚美する／三木露風氏講演會／十五日宇中校講堂に開催」（主幹井上雄馬の開会の辞・三木氏紹介）

「…今年中に既に八種の書物を出版してゐられる。先づ一月の『修道院生活』を始めとして六月には『トラピスト歌集』、七月には『神への道』と第する講説一卷と修道院詩集第二卷『神と人』の二種、最近十月には『お日さま』と題する童謡集が既に書肆の店頭に出て居るのである。更に此の旅を終らるゝ迄に店頭に現はれんとしてゐるのが『小鳥の友』と『露風詩話』の二種で又同時に『信仰の曙』といふ書物が再販される事になつてゐるのは氏の詩作執筆のエネルギーが如何に豊富であり、其の天才の如何に傑出してゐるかを立證する一事例として御紹介の辭に代ふるものである。之れより『文藝と宗教』なる題下、講演されま

すから御静聴を希望します」

「宇和島特有の／民謡を作りたい／來宇した三木露風氏談」

「宇和島は民謡情調のゆたかな處だと感じ民謡をつくり思つてます宇和島には鹿の子踊りのいゝ歌詞があるそうでは非一見したいと思ひますハハア盆踊りの盛な處ですかそうですか矢張り風土がのびやかだから人々ものどかな氣分に満ちて居るのですね。」（十五日朝の談話）

『南豫時事新聞』十一月十七日

「露風氏／高知市へ／十六日出發」

「民謡『宇和島の唄』／露風氏が來宇記念に作る／近く本紙に發表」

「氏は宇和島市の印象を民謡『宇和島の唄』として永久に來遊記念として市民に贈りたいと目下執筆中で數日中に本紙に發表されるが本社では氏の意志を体し之を作曲せしめて宇和島を表現した民謡なき宇和島の誇りとして永く傳へるべく計畫中である」

『南豫時事新聞』十一月十七日・十八日・十九日、三回連載

「文藝と宗教／本社主催宇和島中學校に於ける／三木露風氏の講演」（上）・（中）・（下）三回連載（内容省略）

五 地方記者たちの見た露風

大正十五年は、露風にとつて大きな節目である。佐藤房儀は、「三木露風の活躍は大正五、六年で終わり、それ以後は詩壇の第一線から退いたと見られている。…以後の露風は、宗教詩人となり、作品の魅力に於いて乏しく、詩壇を離れた処で創作を続けたと理解され

ている。…彼の活躍は大正十五年までで、この年をもって第一線を退いたといえる。しかし彼は、詩壇を離れても多量の詩を書いた。彼は原稿用紙に向かつて生存の証を立てるごとく創作をした。だからそれらの作品には、彼の個性は見られなかった」と評している。^(注)

その意味でも、『山崎新聞』に寄稿した大正十五年十一月の「四國の旅と自然と」の紀行文と、その旅で作られた作品は貴重である。また、四国における詩人露風と接した記者たちの評価も新たな露風像を知るうえで重要である。

では、四国の新聞記者たちは、露風をどのように見たのか。

まず文壇での位置であるが、記者たちは「今を時めく詩人」「我日本詩壇に高く輝く貴い力の星」(『四國民報』)、「詩壇の重鎮」(『東豫日報』)、「日本詩壇の第一人者」(『土陽新聞』)、「現代中央詩壇の重鎮として且つ熱心なる信仰の人」「詩聖」「大詩人」(『香川新報』)、「現詩壇の大家」「中央詩壇に於て令名噴々たる詩人」(『愛媛新報』)、「北海道のトラピスト修道院に立て籠つてゐた詩壇の大家」(『海南新聞』)、「我が國詩壇の權威として北原白秋よりも先輩であり象徴詩人としては實に我が詩界にエポックメーカーキングした人」「神秘詩人」「詩壇の名星」(『南豫時事新聞』)と表現している。中央詩壇で活躍する詩人・宗教詩人、象徴詩人として新たな一つの時代を開いた詩人として見ているのである。

次に人柄・人物の印象は、「おだやかな優しい姿」(『四國民報』)、「一番で入学したほどの成績が良く、殊に文學といえは…天才」「健康なる精神は健康なる身体に宿る所以を如實に感得」(『南豫時事新聞』)、「崇高な姿」(『香川新報』)、「瀟洒な和服姿」(『海南新聞』)と記している。俗世間を離れた気高さを感じさせる露風であった。

詩人としての露風については、「新しい体の詩を鼓吹した、詩の道を歩いて美的生活をしてゐられる」(『東豫日報』)、「トラピスト生活の神秘と壯嚴に觸れた」「神秘主義の詩人であり敬虔な宗教人であり熱情的愛國主義者」(『南豫時事新聞』)と伝えている。

講演会については、「思考的な美しい言葉で頗る克明に高貴な文藝の鑑賞を強調し幽遠なる人生を説いて聴衆を魅了した」(『徳島日々新聞』)、「宗教の厳かな伝道を香氣高きことばによつて語り聴衆を傾聴せしめた」(『海南新聞』)とある。若い女性が憧れる神秘境トラピスト生活の講演では、聴衆の三分の一は夫人(宇和島)、若い男女が大半(松山)を占め盛会であつたとする。

その講演の意義について「時弊の匡救に最も必要な健全文藝の發達を希望する意味で此の講演會の益々有意義ならんことを喜び且つ祈るものである」(『南豫時事新聞』)、「現代社會の醜惡なるに反して此の論の内の修道院を讀み給へ／みなさんの生きる世の中にかく熱烈に道の爲に將に眞の爲に神に精進してゐる私達同胞を一人でも多く知つて下さいませ」(『香川新報』)、「現下の我が國の思想は極端に混亂に陥つてゐる秋此神人の獅子吼は將に空谷のけう音ではないでせうか」「世界の謎のトラピスト宗教生活を體驗し其奧義と髓に觸れた氏の詩教一致の境界から現代の思想教育を論じて戴き我等の精神の沃野を培いたいと思います」(『南豫時事新聞』)と述べている。まさに神のような気高い真理・正直を説く露風は、人氣のない寂しい谷に響く足音であるというのである。また詩教一致の境地からの講演は、精神の沃野を養い育てるという意義があると評している。

四国の新聞記者たちの見た露風は、中央詩壇で活躍する詩人であ

り、神秘的なトラピスト修道院で修行した宗教詩人であった。その講演は、教育家や人格的な教養のある人々、婦人たちの聴衆を魅了し、行く先々で多くの人々が色紙に揮毫を求めたのである。

露風はまた、記者たちの詩界に関する取材に対して丁寧に応じている。たとえば「詩の創作について」は「本質的に内部生命を觀照し、表現して、心の世界を歌つたものでなくてはホントの力強い詩は生まれてこない」（『四國民報』）と詩論を述べる。また「日本に於ける詩界について」には「今後は、詩の正しき道が盛んになるだろう」「詩は精神的傾向を帯びて行かねばならぬ。それが正しい道です」（『東豫日報』）と答える。「詩のことについて」は、「詩を作るには先ずリズムを重んずる觀念があつて欲しい。象徴詩を研究されたい。何故ならば象徴詩は詩の中でも最も本質的なもの」（『伊豫新報』）と説く。「詩話會の解散について」には「當全」とし、詩は「象徴派が日本に於いて主潮をなして來たので今後其然うであろうと思ひます」（『土陽新聞』）と答えている。記者たちは、現代文芸傾向を短評する象徴詩人としての露風の一端を知つたのである。

新聞記者たちは、露風がカトリックの布教のためだけではなく、地方の文学・文化の向上に関心を抱いていたことも伝えている。たとえば露風は、「私の希望することゝは一本縣に於いて高尚なる新しい詩の趣味が發達して、そして精神的文明が生まれることである」（『東豫日報』）、「四國でも詩が盛んになる事を望む、それに就いては詩の鑑賞の目を高めなければならぬ。詩の道を歩くのに正しい研究をする必要がある」（『伊豫新報』）と説いている。また露風の松山への愛着について「遠く四國路の田舎に埋もれた讀み人知らずの歌を愛し、隠れた田園詩人の伸び行く姿に慈父の如き愛情

を投げかけてゐる」（『伊豫新報』）と伝えられている。そのことは、宇和島を表現した民謡がないことから「宇和島市の印象を民謡『宇和島の唄』として永久に來遊記念として市民に贈りたい」（『南豫時事新聞』）という気持ちにも現れている。

おわりに

四國への旅は、教区長の招聘による。四國は「由来わが四國は、佛教殊に真言宗の盛な土地でカトリックの布教には困難なところ」であつたためである。^(注7) 露風は、四國巡行の旅についてカトリックの雑誌『小羊』（四國高松市）に「四國巡講記」として寄稿した。そこには、「私は其教會其他のカトリックの狀勢と自然と私の旅行等に於て印象を記さうと思ふ」とある。^(注8) 一方、文学に関しては、「四國で詩が盛んになることを望む」という思いがあり講演をした。^(注9) この二つの思いは、講演の多くが「宗教と文芸」という演題であることが示唆している。そして、そのことを人々に伝えたのが、四國の新聞記者たちであつた。

また露風は、この四國巡講の旅の印象や作品、四國の新聞掲載の記事を、故郷の兵庫県龍野中学時代の同級生山下郁三が編集・発行していた『山崎新聞』に寄稿した。その思いは『山崎新聞』に引用されている四國の新聞記事が、主に露風が語つた文学観であることから、山崎町や龍野町の文学の隆盛を望んだことと推察される。

本稿は、新聞記者の見た詩人としての露風像と、その評価について考察した。この大正十五年という節目の紀行文「四國の旅と自然と」に収められている四國で創作した作品等については別稿を用意している。

引用文献

- (注1) 三木露風、一九二八(昭和三)年五月、「四國巡講記」『小羊』、一頁
- (注2) 一九二七(昭和二年一月)「三木露風氏四國教區講演行脚」『聲』第六百十二号、六十八―六十九頁
- (注3) 一九二七(昭和二年三月)徳島に於ける三木露風氏の講演『聲』、第六百十四号、六十九頁
- (注4) 佐藤卓己、二〇〇六年「メディア・イベントの誕生」『メディア・社会』岩波新書、六十四頁
- (注5) 注3に同じ
- (注6) 佐藤房儀、一九八三年六月「三木露風論(承前)」『国文学研究』八〇、七十七頁
- (注7) 注3に同じ
- (注8) 注1に同じ
- (注9) 三木露風、一九二九(昭和二)九月二十一日「四國の旅と自然と(十五)」『山崎新聞』六一三号

付記

本稿は、二〇一九年八月二十五日に「地方記者たちの見た三木露風―四國巡講の旅―」と題して、東アジア日本語教育・日本文化研究学会二〇一九年度国際学会(九州看護福祉大学)において口頭発表した草稿に加筆したものである。